

とは、授業の中でのつまづき解消の手だてによる
ところが大きいと思われるが、方程式の学習を進
める上で必要な既習事項について、前提条件テ
ストの結果をもとに、解けた(○)、解けない(×)の
2段階で、それぞれの問題ごとに、自己確かめを
したことがよかったのではないかと考える。すな
わち、前提条件となる既習事項について、自分
のできるものとできないものがはっきりととらえ
られ、そのことによって、授業にのぞむ際に何を
やっておかなければならないかを知り、自分に
あった学習を進めることができたからである
と考える。

以上のことから、「個の確かな学習の成立」の
一つの条件である、学習のめあてをはっきりと
らえさせるための「学習のめあて表」は、かなり
効果的なものであったと考える。

解決策② 「形成的評価問題をもとに、自己の
つまづきの原因や到達の度合いをとらえ、それ
に応じた学習コースを選択させ、その学習を進
める中で個に応じた働きかけをする」について

一人一人に確かな学習が成立するためには、
個に応じた学習が進められるような場を設定し、
その中で一人一人に十分な働きかけをしていく
ことが最も重要なことである。そのため、ある
まとまりの学習を終えたところで、その学習内
容についての形成的評価問題をもとに、自己の
つまづきや到達の度合いに応じて学習コースを
選択し、学習を進めていくという形の分枝型学
習を取り入れることにした。

このような分枝型学習が、一人一人の生徒に
確かな学習を成立させるのにふさわしいもので
あったかどうかについて、生徒の学習への取
組み方、教師の働きかけ、生徒の学習内容の
定着の三つの観点からまとめてみたい。

① 生徒の学習の取り組み方に変容がみられたか。

まず、このような分枝型学習についての生徒
の受けとめ方を見てみよう。すでに、感想文
の分析の中で詳しく述べたとおりであるが、
かなり多くの生徒が学習しやすかったと答
えている。その理

由のほとんどが、自分の力に応じて学習が
進められたことをあげている。このことは、
「おもしろい」「楽しい」といった情意面
での高まりや、「意欲的に学習に取り組むよ
うになった」「ねばり強く学習するよ
うになった」という学習への積極的な取
組み方にも現れてきている。このような学
習の取り組み方についての変容は、授
業者の感想からも十分うかがうことが
できる。

反面、確かめのわずらわしさ、Aコース
の問題もよくできなかったなどの理由から、
「どうも取り組みにくい、はじめない」と
いう生徒もわずかではあるがいる。しか
も、このような取り組みにくさを指摘して
いるのは、比較的下位群の生徒である。
このような生徒に対しては、一層適切
な働きかけに努め、分枝型学習に積極
的に取り組めるようにしたい。

② 分枝型学習を進める中で、教師は個
に応じた働きかけをすることができたか。

第2回目の研究授業をもとに述べることに
する。この時間での教師の働きかけの方針
としては、全問正解者は、特に教師の指
導・援助がなくても自力でCコースの学
習を進められるだろうと考え、つまづ
きのあった13名を中心にして、一人一
人に働きかけの時間を多くとるようにし
た。

この生徒たちへの働きかけのねらいは、
一つはつまづきを解消させることであり、
もう一つは選んだコースの問題を確実に
できるようにさせることであつた。時間
にして約15分であつたが、生徒が次々
と教師のもとに集まり、休みなく働
きかけが進められ、その数は延べ人数
にして31名にものぼつた。中には、
正負の数や文字式の計算でのつまづ
き解消のために、3回もの指導・援助
を受けた生徒もいた。このような生徒
には励ましや賞賛をするなど、自信
を持たせ、意欲を喚起する配慮が感
じられた。また、コースの選択につ
いても、生徒の意志を尊重しながら、
それぞれに応じたアドバイスがな
されていた。この間、Cコースを学
習していた生徒の中に、解答に自信
がなく、教師に確かめを求めに来た
のが2名見られた。